

Title	F・I・グリーンシュタイン著『パーソナリティと政治』
Sub Title	Fred I. Greenstein, Personality and politics : problems of evidence, inference, and conceptualization
Author	鶴木, 真(Tsuruki, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.10 (1971. 10) ,p.142- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19711015-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

もしれない——そして、その結果、世界は今日ほど複雑ではなかつたかもしれない(一九二頁)。かくて、われわれは、この著者の見解のなかに、反共の旗印の下に、アメリカ的政治体制を中国に押しつける立場を拒否し、中共の独立的・民族主義的基盤を承認した上で、それと現実的關係を樹立しようとする態度を見てとることができるのである。かかる著者の視角は、今日アメリカ政府が中国との間に作り出そうとしている關係を考える上でも、無關係ではありえないであらう。(一九七・七・二六) (山田 辰雄)

Fred I. Greenstein,

Personality and Politics: Problems of Evidence, Inference, and Conceptualization.

Markham Publishing Company, Chicago, 1969,
xiii + 200pp.

F・I・グリーンシュタイン著

『パーソンナリティと政治』

一

本書は Markham Political Science Series の一冊である。本書を構成する各章は、著者がすでに一九六五年から一九六九年の間に発表した論文をもとに、加筆修正されたものである。また本書の理論的背

景は、一九六八年六月の "The Journal of Social Issues" から得たものである。これは "Personality and Politics: Theoretical and Methodological Issues" というタイトルの下に編集された、この分野での新しい注目すべきところであった。本書の著者である F. Greenstein が編者として "The Need for Systematic Inquiry into Personality and Politics: Introduction and Overview" という巻頭論文を載せている。この論文が本書の第一章に加筆転載されている。その加筆部分は、先の雑誌の第二論文である B. Smith の "A Map for the Analysis of Personality and Politics" に全面的に依存している。また、その第三論文である A. George の "Power as a Compensatory Value for Political Leaders" は、本書の第三章の主な引用箇所となっている。したがって、本書の紹介と批評はこの雑誌の各論文をふまえてなされなければならないであらう。しかしながら、ここでは物理的制約もあるので、本書の第一章と B. Smith の「分析構図」を中心に、少しく詳細に紹介してみたいと思う。その理由は、そうすることによつて、本書の理論的枠組を明らかにし得ると同時に、この分野の今日的趨勢を概観し得ると考えたからである。

二

行動科学における、インプット・アウトプット・モデルの発展が、それを仲介するオーガニズムの解明によりなされたことは事実である。政治的刺激と政治的行動の諸結果をよりよく解明するため

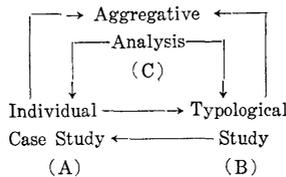
には、それを仲介するオーガニズムの心理的特性について解明する努力を払うことは当然であらう。しかしながら、それを実際に行う場合には、非常に多岐にわたる調査や思索が列挙しうゑ。そこで著者は、これを三つの範疇に分けることができるとしている。その第一は、一人の政治的行為者の心理的な「ケース・ヒストリー」の研究である。第二は、政治的行為者たちのタイプの心理学的研究である。第三は、政治的諸制度の機能にたいして、個々の政治行為者や行為者のタイプの配置が持つ全体としての影響に、総計的解明をこころみる研究である。各々の分類に属する代表的文献は次のとおりである。第一の「ケース・スタディ」……R. Lane, Political Ideology: why the American common man believes what he does, New York: Free Press, 1962. B. Smith, J. Bruner & R. White, Opinions and Personality, New York: Wiley, 1956. A. George & J. George, Woodrow Wilson and Colonel House; a personality study, New York: John Day, 1956. ……など。

第二の「タイプ・ロジック・システム」……T. Adorno et al. The Authoritarian Personality, New York: Harper, 1950. R. Christie & M. Jahoda (eds.), Studies in the Scope and Method of "the Authoritarian Personality", Glencoe: The Free Press, 1954. H. Laswell, Psychology and Politics, New York: Viking Press, 1960; original 1930. J. Farber, The Lawmakers, New Haven: Yale U.P., 1965. ……など。

第三の「アグリゲイティブ・アナリシス」……G. Gogor & J.

Rickman, The People of Great Russia, New York: Chanticleer Press, 1950. M. Mead, And Keep your power dry, New York: W. Morrow, 1942. L. Bramson & G. Goethals (eds.) War: studies from psychology, sociology, anthropology, New York: Basic Books, 1964. ……など。

しかしながら、ここに示した代表的文献においても現実にはこの三種類の分析の一つ以上のものを含んでいる。とはいへ、その分析しようとする焦点がどこにおかれているかにより、方法論上の分類が可能となる。著者は、この三範疇の間に興味ある相互作用があることを指摘し、それを第一図のように図示している。すなわち、



【第 1 図】

われわれが、ある行為者のパーソナリテ
イ構成を分析する過程で、われわれがと
りあげた行為者が他の一定の政治行為者
たちと、主要な諸点において類似してい
るという考えに到達する場合がある。そ
して、もしこの類似している諸点をさら
に追究するならば、われわれ自身は帰納
的の一つのタイプロジックを構成する方向
に進むことになる(A→B)。しかし、次のようなこともまた考え
られる。一組の理論と経験的事例をむすびつけているタイプロジ
ックは、それを構成している個々の行為者についての一組の仮説に還元
される場合がある(B→A)。個人および個人々のタイプのから総計
的な構造に移る過程において、われわれは、その体系内における諸

タイプの分布の適切性について多くの理論が存在することを知つている(B↓C)。ワイマールドイツの崩壊と権威的パーソナリティ・タイプに関して、E・フロムの指摘は有名である。そして、適所にうまく配置された個人が、総計としてのシステムに実質的な影響を与えることは、政治においては常にみうけられる(A↓C)。最後に、文化とパーソナリティ(社会構造とパーソナリティ)に関する問題は古くからとりあげられてきたものである。このことは、われわれに逆方向をむいた因果的矢印が指摘できることを示している。すなわち、システムはそれを構成する個人と、個人々のタイプに影響を与えているのである(C↓A, C↓B)。

パーソナリティと政治分析のこれらの各々の範疇には、独特の利点があると同様に難点もある。それは次のような批判的指摘によつて明らかにされている。(一)、政治的に重要な人物のケース・スタディにおいて、パーソナリティの診断的解釈と行動の説明は、しばしば「独断的」なものとして考えられてきたし、あるいは少くともその再現性が疑われてきたのである。

また臨床的なケース・ヒストリーは、そのとりあげている人物の適応的なスタイルにおける病理学的要素を過度に強調しているようにしばしば考えられるし、また創造的な適合にたいする個人的な能力に必要な以上に敏感になつていてと考えられるのである。

(二)、質問紙調査のデータに基礎をおいた分析的量的でタイプロジカルなモードを採用する調査者たちは、パーソナリティとその関連

ある事項を測定するための、信用をおきうる妥当な手段を發展させる上で手に負えない困難に直面してしまつたのである。

(三)、そして最後に、「National Character」などに見られる統計的な現象についての心理学的研究は、「還元主義」であるといわれている。

このような難点が、今まで多くの学者をして、パーソナリティと政治についての知識を体系的に一層發展させようとすることに消極的な立場をとらせてきたのである。とはいえ、このような難点がたとえ存在したとしても、最近、個人的な心理学的変数のある一定のものを、政治活動のある一定の範疇に関係づけることを目ざした数多くの研究がなされている。著者は、その代表的なものとして、A. Campbellと、ミシガン大学調査研究所の人々によりなされた、選挙行動の心理的な決定要因についての膨大なデータを用いた調査をあげてゐる。(A. Campbell et al. The Voter Decides. Evanston, Row. Peterson, 1954. The American Voter. New York: Wiley, 1960. Election and The Political Order, New York: Wiley, 1966) 著者はその際、パーソナリティという言葉の意味が、心理学者と政治学者で多少異なることを指摘している。すなわち、キャンベルらの研究から選挙における選択を説明する上で、もつとも有効と考えられた変数は現在のところ主として、態度的なものである。それは、その時点の問題にたいする人々の見解、その基盤となつている政治的信念、候補者への反応、政党への忠誠心などである。ほとんどの心理学者は、このような心理学的変数を「パーソナリティ」と呼んでいる。

一方、ほとんどの政治学者は、ミシガン大学のグループもふくめて、「パーソナリティ」という言葉を、個人を特徴づけるより「深層的な、非政治的な、心理的傾向」におきかえている。たとえば、それらは、「内向性」「達成要求」などである。

そして問題は、このような使用法のどちらが妥当性を持つかということではなくて、政治行動を明らかにする上で、個人的心理の体系的な使用がほとんど今までなされなかつたことであると著者は主張する。そして今日では、そのための素地が、徐々にではあるが準備されてきているとしている。

* * *

このような素地の準備を進歩と考えるならば、それには二つの点が指摘できるとしている。その第一は、理論および概念的な洗練が一層促進されてきたということであり、第二は、パーソナリティと政治の分析のモードの発展であるとしている。前者は、パーソナリティと政治を還元主義的な条件の下で理論づけようとする傾向がますます減ってきていることを意味している。“reduction”にたいする建設的な選択肢は、“contextualism”が対応する。それは社会的事象の説明にたいする多変数的、条件のプローチである。具体的には B. Smith の *The Journal of Social Issues* の中で示された “A Map for the Analysis of Personality” を全面的にとり入れているのである。

後者に関しては、以下に示した三つの分析範疇をかかげている。

紹介と批評

「ケース・スタディ」従来の還元主義者による政治行為者の病理学と大きく異つた近年のめざましい業績として、George & George (1956) や E. Erikson, *Young man Luther*. New York: Norton, 1958 がある。とくに、前者はケース・スタディの評価や解釈を標準化するような一組の基準を作り上げようとする方向にむかつている。このような方法的、理論的志向が強ければ、一つのケース分析が達成しうる正確さには疑いもなく限度があるけれども、現在のなされている点を越えて進歩する可能性も十分考えられるのである。

「タイプロジカル・アナリシス」この分析には、過去から現在までほぼ三つの段階がある。すなわち、その第一は、ラスウェルによつて、一九三〇年に *Psychology and Politics* の中で示されたような分析の基礎となる “Nuclear Types” を確認しようとする努力であつた。第二は、これをこころみる中で、ラスウェルにより “correlational typing” と呼ばれたものである。それは、“nuclear” を決定する特徴とむすびついたその他の特徴のかたまりや症候群を確認することである。ラスウェルは、調査の論理が “nuclear” なのからみちびき出されたタイプを “correlational” なタイプへもたらしことを明らかにしたのである。第三は、今日的段階であり、調査の論理は、“correlational types” を、ラスウェルの言葉の “developmental types” へもたらし動きを促進したのである。それは、パーソナリティを形成し発展させる重要な経験を、単に幼児期におけるものとして見るよりも、生活周期をとおしておさえようとする傾向と一致するもの

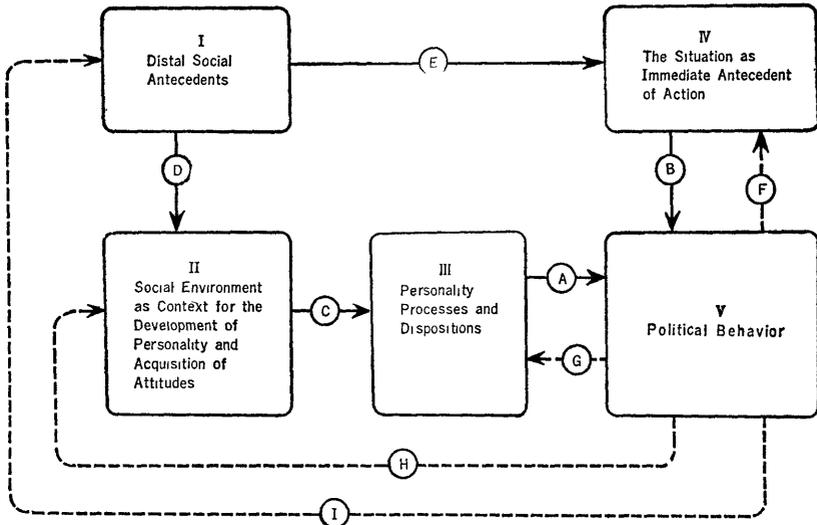
である。

「アグリゲイティブ・アナリシス」 総計的分析の領域においてもパーソナリティと政治の分析における理論と方法が満足のいく方向に進んでいるのである。政治学者たちが、政治行為者の心理の分析や分類に関心を示しているのは、政治学者が本来的にそうした主題に興味を持っているのではなくて、むしろそうした政治行為者から構成されている一つの集合体において分析の興味を持っているからである。その際、部分から全体へ移行する問題は、社会科学のみならず自然科学においても特有の仕方があり、あるいは少くともそれをしようとする理論家の間で独特の方法が持たれているのである。たとえば、政治体系の特徴についてのデータを、政治行為者の動機的な特徴についてのデータと、かわり合わせることをこころみている経験的な著作の一つの例は、C・マクレランドの「達成要求」からのこころみに典型的にあらわされているとしている。

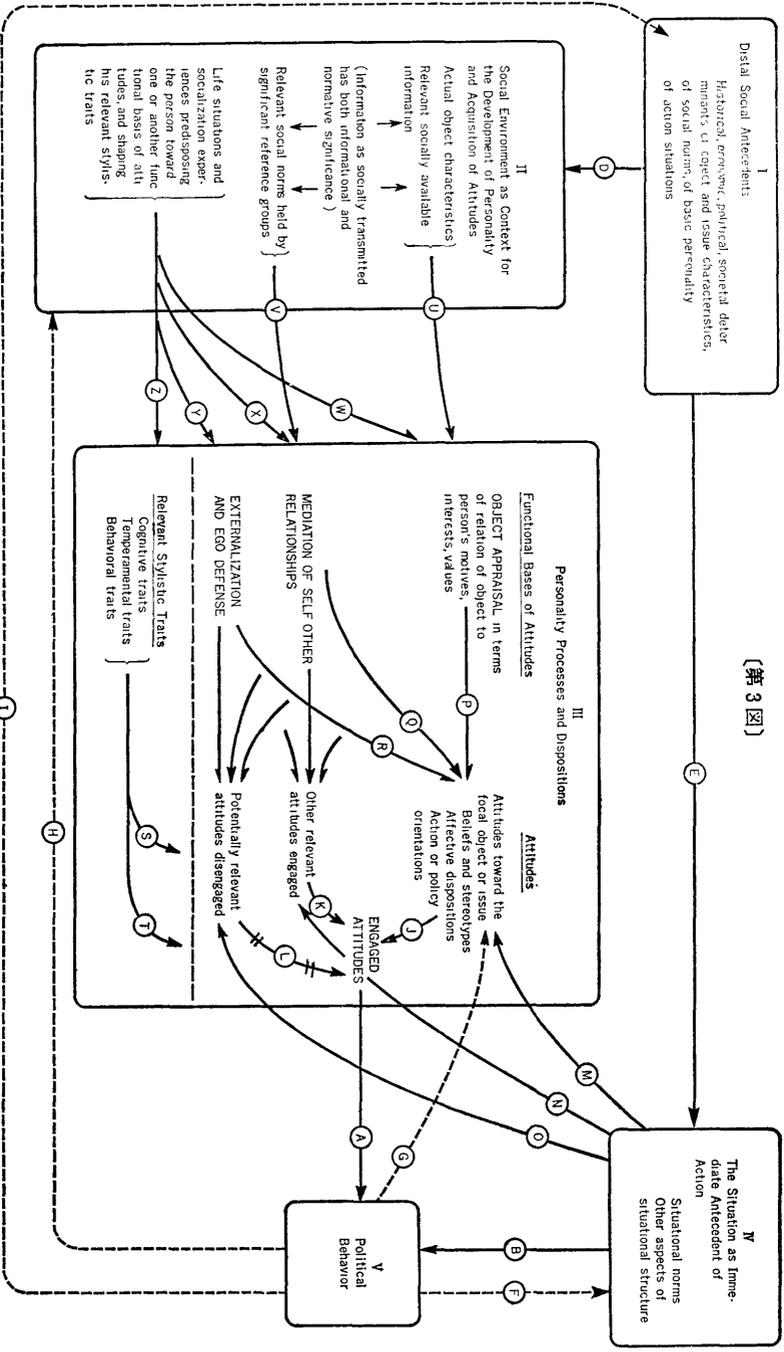
三

さて次に、本書を離れて、著者が全面的に採用したスミスの「分祈構図」の紹介にうつることにしよう。

スミスは基本的に、以上紹介したグリーンシュタインの主張と一致している。スミスは次のように述べている。「パーソナリティと政治」の研究は、状況的要因を無視できない。それは、もしわれわれがパーソナリティの明白な寄与だけをとりあげようとする場合でも、基本的に考慮に入れねばならないものなのである。ただし、社



〔第2図〕



[第3図]

会的行為をこの線にそつて具体的に分析しようとする場合、戦略的に主要な影響力は、パーソナルな構成要素か状況的な構成要素かを問題にすることはさしつかえないとしている。しかしともかく、双方の決定要因は無視できないのである。そこで、スマスは中窺理論の必要性、インターディシプリナリー・アプローチの必要性を強調する。彼は自らの作成した「分析構図」として、全体を概観する第二図と、各々のボックスの内容を検討した後の完成図としての第三図を提示する。それは、ブルナー、ホワイトらと共に既に提示したモデルに一層推考を加え、拡大修正したものである。

その主要な点を紹介すると、「第一図」は五つの主要なパネルの条件の下で、パーソナリティと政治を分析する枠組を示したものである。この「分析構図」を心理学的に考察するかぎり、パネル3は全体の中心的位置を占めることになる。因果関係は矢印で示されている。それは左から右への動きとして、この図を読むために、*「パネル5」*で示された実際の行動は右隅に置かれている。*「パネル3」*は、パーソナリティのプロセスと傾向に關係した諸変数のタイプを示すものである。*「パネル4」*は行為の直接の先行条件としての、人間の行動の状況を示している。*「パネル2」*には、人間にとつてより持続的な社会的環境の特徴がふくまれている。それは政治行為者が、どうしてそうした政治行為をしたかを説明するものである。*「パネル1」*は、人が社会化される環境あるいは人が行為する状況の明確な特徴を規定する上で役立つ、政治、経済、歴史、そ

の他のより基本的、より末端的な要因を示すものである。行動している個人という点から考えれば、*「パネル1」*の内容は概念的には末端に位置していても、しかしそれは他の部門と同時的に存在することもしばしばある。

行動のパネルから出ている点線の矢印は、フィードバック・ループを示したものである。すなわち政治行動は結果であると共に原因でもあるからである。ある状況の中で、その人の行為は、社会的対象を直ちに变化させるかも知れない（*「矢印F」*）。われわれが多数の人々の行動の総和を考えた時、その帰結は社会的環境を変へるかも知れない（*「矢印H」*）。より長期的には、個々人の行動は社会とその歴史を形成するのである（*「矢印I」*）。

スマスは、*「パネル4」*の内容として規範と状況とをあげている。*「パネル3」*において、態度とは、人間の心理の“cognitive”, “emotional”, “conative”な傾向が統合されたものとしてあつかわれている。その際、われわれの問題は二面性を持つている。つまり、どのようにしてある人の態度がその政治的態度と關係を持つようになるかを公式化することと、どうしてそのような態度が形成され維持されるかをその人の心理のエコノミーの現実の動きと關係づけて公式化しようとするものなのである。

前者が*「パネル3」*の右側の部分であり、後者が左側の部分である。前者については、状況が果す二つの役割が注目されるべきである。その第一は、ある人の“engaged attitudes”と共に彼の行動の

共通決定要素となるのである（矢印B）。さらに他の一つは未だ決定しないで残してある潜在的適切性をもった態度を認め助長し（矢印O）、その行為者の特定の態度を特に活発化させるのである（矢印MとN）。後者すなわち「ヘパネル3」の左側部分においては、心理のエコノミーを調整^{アジャストメント}という内的なエコノミーと適合^{適合}という外的なエコノミーに分けて考えている。人間の態度やその他の学習された心理構造は、これらのエコノミーに役立つかぎり獲得され維持されるのである。態度の機能的な分類基準として三つの項目をかかっている。「ヘパネル2」は、ある行為者の政治態度やその人のスタイリスティックなパーソナリティ特性の発展、維持、変化に適した社会的環境の側面を確認するための手段を提供してくれる。そこには情報の量と質の問題が、利用可能性の問題、社会的位置の問題とからなつててくるのである（矢印U）。コミュニケーションのチャンネルを通して、ある人に到達するあるトピックについての情報は二重の関連性をもっている。このことは、「ヘパネル2」内部の矢印が示しているところである。すなわちそれは、object appraisalのプロセスの中にフィード・バックするばかりでなく、浸透している社会的規範についてのいま以上の情報をもたらすのである。

最後に、その人の生活の場や社会化の経験も何らかの機能的な基盤にむけてその人に先有傾向を与えるのである（矢印W・X・Y）。矢印Zは人のスタイリスティックな特徴が社会化される際の決定要素に關するものである。

このスミスの「分析構図」について、グリーンシュタインは、その利点を著書の中で次のように指摘している。それは「contextual analysis」に寄与することである。つまり五つの変数間やその内部での複雑な相互関係を、詳細に分析しようとするところみているのである。多変数分析は、「パーソナリティと政治」の分析にとつて特に重要なものである。それは複雑なものである。したがつて、パーソナリティと政治行動の指標間の単純で直接的な関係を、われわれはみつめることはできないのである。

四

グリーンシュタインは、その著書においてこれまで紹介した部分を、その理論的基礎としている。そして彼は今日まで、パーソナリティと政治の研究について五つの批判が存在してきたとしている。そのうちの二つは批判自体に基本的な誤りがあるが、残りの三つは「如何にして、どのような事情において」パーソナリティが政治行動に影響するかを考えた場合、それらはもはや批判でなくなるとしている。それらはむしろ、さらに進んだ諸仮説をうち建てる条件を提供するものであるとして（第二章参照）。

これらの批判を言いかえる中で、著者は「パーソナリティ」には三つの使い方があることを指摘している。それらは、(一)個人の政治行為への刺激、(二)個々の行為者の人間の特性における差、(三)個人的相違の特定の内容、である。そして、このような事実もまた「パーソナリティは政治の分析をする際考慮に入れられるべきかどうか」

というような一般的な質問に、一般的な解答ができないことを物語っているとしている。

著者が指摘しているように、政治学者にとつて強く関心を引かれるのは、個々人やそのタイプの分析よりも、むしろそれらの総計が政治体系の作動に与える影響に關してである。したがつて、私が本書のその他の章で強く関心を引かれたのは第五章の“Aggregative Effects of Personality Characteristics on Political System”であつた。そこでは著者は、個人の行動やタイプの総計は単純な数学的手法でなすことはできない。しかし、この総計にとつて受け入れ可能な手続にむかつての戦略はあるとして次の四つを挙げている。(一)政治行動がおきた現実の環境内での、行為者とその心理的分析、(二)一定の制度的プロセスに参加している個々人の心理学的な調査、(三)行為者の役割遂行から由来する結果がその行為者に与える影響の考慮、(四)役割要件と役割遂行者のパーソナリティとの關係を確認する理論の設定、である。

五

本書の基本的立場は著者の次のような言葉に要約されていよう。パーソナリティと政治についての体系的な研究の必要が存在する。というのは、政治には刺激とその結果としての行動を仲介する個人的な心理的変数について、われわれが理解する場合にのみ政治行動が説明されうる事例が多数存在しているからである。つまり、わ

れわれはある行為者が他者と区別されるべき特徴を理解する必要がある。

今日、この分野は徐々にではあるが整備されつつある。つまり、個々人やそのタイプの政治的心理を特徴づけようとするところのみを持つ基準と、政治体系の個々の部分が全体の体系の機能に如何に寄与するかという複雑な事柄を分析するための基準とが癒着させられてきたのである。

われわれは政治的心理的な側面についての関心の新しい動きをみつけるであろうし、また政治における人間的決定要因についてのわれわれの知識の大きな空白部分に徐々に浸透してくる、成立しつつある厳密な調査の体系をみつけるであろう。

* * *

私は、この分野に政治学者と心理学者の基本的に異なるアプローチが存在するように思える。スミスの「分析構図」でいうならば、それが彼自身も述べているように、パネル3 (パーソナリティのプロセスと傾向) が中心に置かれているかぎり、まさに心理学者が政治行動を分析するための図である。政治学者にとつてはむしろスミスが、点線で示した部分——つまり彼がフィードバック・ループと呼んだ部分——が分析の中心とならねばならないであろう。残念ながら、スミスにおいてもグリーンシュタインにおいてもこの点の論及がほとんどなされていない。それが本書において、総計的分析に關する章をとるに足りない、あたりさわりのないものにしてしまつて

いる理由ともなつてゐる。

しかし、本書は The Journal of Social Issues, July, 1968. がな
したところみは、高く評価されるべきであり、われわれこの分野に
強く関心をいだいている者のみならず、その他の政治学者や、社会
心理学者にとつて広く一読するに値あるものと考ええる。

(一九七一・八・二〇) 鶴木 真